特4
8

太極拳道

宗家 楊澄甫先生校閲

大阪 渡邊光

265
109

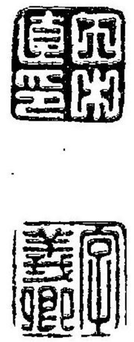
弦中傳

意緒

明治
43. 6. 27
内交

己酉初夏

柳江題



太田道灌

王蘭作

抑太田道灌と申けるは
少壯のとき、武にはげみ
築城の道に精しければ
千代田寶田の地を相し
資性剛毅勇敢にして
文にうとくたはしゝも
長禄元年武藏の國
江戸城をぞ築かれける

いまぞかしこき大宮の
くゐ井の庭と仰がれて
いと譽あるわざになむ
ときしもころは春の末
城の經營たはりければ
いさむ駿馬に跨りつ
士卒引き連れ道灌は
鷹野にこそは出でにけり
さして行衛はしら雲と
まがふばかりの櫻田や

競べる駒のこゝろすら
たなびかれぬる霞が關
月毛の色もたぼろにて
ひづめに白ふ若くきの
もゆるちまたの春風に
けぶる柳のいとまなく
なびくみどりの亂髪
いふすべもなき眺め哉
菫蒲公英かほる野に
こゝろも空になく雲雀

影は何處にをちこちの
士卒にはぐれ道灌は
折しもたこる雨ぐもに
一むら茂る森を目指し
はや降りかゝる春雨は
たつきもしらぬ原中に
一人さまよひ居たりけり
こゝろせかれて道灌は
駒をはやめて進みしが
花を惜みしみやびをの
そゞぐ涙と知られけり
たれまつ風に琴の音も
駒の足掻をゆるめつゝ
頼むかげとて賤が家の
いかに此家の内に物申さん
漸く森にちかづけば
かよふ調のゆかしさに
聲をしるべに道灌は
門邊に駒を立てさせて
けふ此わたりの狩くらに

雨具の用意もあらざれば
しとゝにぬれて候ひぬ
あはれ一領の蓑を貸し給へと
聲さはやかに申げり
たのまふ人に驚かされ
琴を掻い遣り静々と
衣紋つくろひ出で来しは
鄙に稀なるたをやめの
年はいざよひ花の面
いづれよりある姫百合の

草葉がくれに世を忍ぶ
氣色は色に見えにけり
されば道灌目禮して
いまし申候ごとく
蓑をば貸して給はれと
二夕度三度いひけれど
答は絶えて口なしの
露も溢れんほゝゑみを
たゝえて匂ふ山ぶきの
一枝折りてさゝげつゝ

たゝはゆげにゝ差出せば
いぶかしながら鶯の
それならなくに山吹を
孤鞍衝雨叩芒茨
小女不言花不語
道灌其意をさとりぬず
笠に縫ふてふ梅のはな
かざして遂に歸りけり
小女爲贈花一枝
英雄心緒亂如絲

さるほどに太田道灌は
我いま蓑を借らばやと
その家の少女山ぶきを
如何なる意のあるやらむ
そは恐多き事なれども
近侍に出逢ひ仰せけるは
賤が家に立ち寄りしに
我に與へてゝもの言はず
解て聞せよと有ければ
そゝ〳〵これは

七重八重花は咲けども山吹の
みの一ツだになきぞかなしき

斯いふ古歌の意を採て蓑一ツだになきよしを
花によそへて答へ也と言れて道灌大に嗟歎
イデ是よりは山狩を止め和歌詩文を學ばんと
最愧らひて言はれしが つひに詩歌に秀でけり

人はこゝろによる浪の遠くなるみの濱千鳥
鳴音ぞ今も残るらむ君がきまゝ狩ぎぬは

一二三四いつまでも むかし七重か八重山吹
けふ九重に匂ふめり 是れ言の葉に咲く花の

黄金の色となりにけり　黄金の色となりにけり

明治四十三年六月十日印刷
仝　四十三年六月二十五日發行

發行兼編輯人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　有村彌四郎

印刷人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井護三郎　電話東四五五九番

印刷兼發行所　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井改進堂　長電話東二七〇番

265
109